

ミネソタ便り 13 (緊急報告編 3)

龍宮城であけた玉手箱

事件が起きて2週間が過ぎようとしている。この間に Easter Sunday (復活祭)があった。12個のプラスチックのカラー卵に十字架、石、布など、決められたいろいろなものを入れる儀式や、本物の卵に食用カラーを塗って食べる遊びも経験した。公園などを利用して行くこどもたちが楽しみにしている恒例の宝探し(小さなキャンデー袋)で一緒に探しまわった。こどもたちのはしゃぎ振りは変わらないのだが、周辺の大人たちの表情に陽気さはみえない。Happy Easter の声もあまり聴かれなかった。

来てまもなくのころ、準備した話題のひとつに9・11事件のことをよく取り上げた。このときは、雄弁に事件の重大性や特殊性について身振りを加え、表情豊かに語ってくれた。その同じ先生が、この事件の話になると肩をちょいと上げ、両手をちょっと開いて I don't know. と小声で言う。

周りの人たちの表情を追っているこのときに、その表情をもっと霧に包んでしまうような悲しい出来事が起きてしまった。ローマ法王 Pope John Paul (1920~2005)の死去の知らせである。4月2日、午前1時30分(アメリカの当地の時間)、カソリック教徒にとっては大変な悲しみである。ここ数ヶ月はローマ法王の病状の一進一退が毎日、新聞の Front Section に載り続けてはいた。

4月1日、金曜日の夜に学校の先生方と教会の関係者で慰労会が準備されていた。これは2月の中旬 Ash Wednesday (聖灰水曜日、四旬節 = Lent = の初日)から始まり復活祭までの40日間に行った行事への労いの会である。だが、危篤の知らせが届き、急遽とりやめになった。大阪で迎えた昭和天皇の崩御を思い出した。しばらくは喪に服す期間が続くであろう。

この間に、この Red Lake の忌まわしい事件は Crookston の人々の話題からそっと姿を消してしまうであろう。

もうこれ以上は、マスコミに任せるしかない。お手あげだ。

まだ帰国していないが「玉手箱」をあけてしまう。今回の事件や市民の表情の謎はそこから推理していただくことにしよう。

アメリカの歴史は、インドと間違えて新大陸が発見された1492年から始まる「アメリカ建国史」だ。世界中の人たちが学校で一度は学ぶ歴史である。

遠い先祖を持つ日本が2,665年前に始めたと言われる日本国。229年前と桁が違う浅い時代に始まったアメリカ国。しかも、ドでかい大陸で。大変な違いだ。

一方、アメリカには、あまり普及されていない「もうひとつのアメリカ史」と言われるものがふたつある。

ひとつは「アフリカン・アメリカンの歴史」であり、もうひとつは「アメリカ・インディアンの歴史」である。黒人もインディアンもアメリカ建国史には始終でてる。しかし、それは脇役としての登場である。主役はあくまでヨーロッパから移住し開拓し、建国のため活躍している白人たちだ。

「もうひとつの歴史」ふたつは、黒人とインディアンをそれぞれ主役とし、白人を脇役とした歴史の見方である。

黒人の歴史の最初は、不幸にして連れてこられた16世紀の奴隷から始まった。19世紀までにアフリカから3ヶ月以上の船旅で無事アメリカ大陸にたどり着いた数は、1,000万人を下らないといわれている。その数倍はアフリカの地を出発しているとも言われている数だ。しかし、解放を経て、代を重ね、白人と血を交えて、アメリカ国民としての市民権を勝ち取った歴史である。

5世紀近い期間で世代を重ねた歴史でもある。そして、いまやだれもアフリカに帰りたいたと言っていない。アフリカからも返してくれと言われていない。このアメリカ大陸で生きてゆく民族になったのである。先祖の地ではないが子孫を含め永住の地だ。これは、移住した白人とこれから同じ運命を背負っていく民族だ。そして、まだ完璧ではないが、すべての社会的な場で活躍できるよう流れは動いている。いまや、政治、宗教、スポーツ、音楽、ダンスなど参加できる分野では、白人を超えてアメリカの名声を高める役割を果たすことも多くなった。宗教も同じである。外から見るとよいコンビの兄弟姉妹に成長しているように見える。しかし、同じ屋根の下で生涯共に棲むほど溶け合っていない。将来すべてがほぼ平等になったとき、歴史の反動が表面化するであろう。連れてこられ、使いまわされた恨みの根は深い。

インディアンの歴史は、悲しいだけだ。先祖をどの時期に持ったかは不明だ。しかし、最初にこの大陸にたどり着いたのは彼らの先祖だ。歴史にはないが最初の発見者であろう。この大陸の地とその自然とそこに棲んでいた動物たちの一員として生きてきた長い歴史がある。

それが突然、侵略者によって奪われ、変えられ、塗り替えられてゆく歴史が始まってしまった。しかし、先祖から命と土地は一緒だと教わり、信じてきた。First Nation の棲むところは他にはない。彼らも侵略者から

いろいろなことを教わった。大陸になかった馬の使い方。銃という金属の使い方。その他いろいろある。そして、もし侵略者である白人および一緒に来た黒人が、この大陸で子孫ともども永住の地として棲んでいこうと言うならば、一番この地を知っている彼らから多くを学んで欲しい。現に賢い英国の貴族が始めたボーイスカウトは、インディアンのアウトドアライフが下敷きになっている。厳しい自然でのサバイバル術や斥候(スカウト)の技、アウトドアでの会議の運営と仕方、すべてを取り入れてある。この地で棲むなら侵略者たちが歩み寄ってくれ。彼らの生き方を範として一緒にこの地で棲んでくれ。理解できない宗教を押し付けないでくれ。といい続けてきた。それは、いまでも変わらない。将来も変わらない。そんな歴史だ。

いまのアメリカには、このそれぞれの歴史を持った民族が同じ屋根の下で生活している。根の深い仇同士が3つ巴で一つ屋根の下にいる。

そしてこの問題解決を更に困難なものにしているもうひとつの要因は、被害者が外国にいないことだ。すべてひとつの国に同じ国民として同居していることだ。

ヨーロッパ諸国やニッポンが行ったといわれている侵略行為は、一部を除き被害者がすべて外国にいる。始終、被害国の政治的リーダーたちが国民を代表し、解決と補償を要求し、国際問題にする。結果は、一部を除き先祖の住んだ地で子孫が独立して住む形で解決しつつある。政治的妥協もある。補償も続いている。しかし、発展型だ。

アメリカが持つこれらの問題に対し外国の政治家たちは不干渉だ。お金持ちの国、強い国のひとつと扱いだ。国際的な政治問題にはならない。当然だろう。政治家とはそんなものだ。すべて自国で解決しなければならぬ。

こんな中でアメリカ建国史の主役であった白人のリーダーたちを除く大多数の人たちは、内なる悩みを4つ持ち続けることになった。

侵略者としての良心の呵責。連れてきた者への怯え。消滅を試みた者の存在と同化できない絶望的な不安。そして最後に、現在ますます増えてきた他国からの移民希望者(同じ穴の貉)に対する拒絶論理のたて難さ。そして辛いとき、やはり先祖の地でないところで先祖の違う人たちと一緒に生活している寂しさは本能が感じるものだろう。

終戦直後、進駐軍が日本に上陸し、いままで政治家リーダーや軍人たちからだけ見ていた日本人が、善悪はいったん置くとして、先祖を持ち、先祖の地でひとつになって生きつづけている姿を直に目にしたときのショックや自分たちとの違いは大変なものであっただろう。遣る瀬無い先祖への望郷の念を持った一般兵が数多くいたであろう。

政治、経済、軍事、宗教を任されているリーダーたち以外の一般市民には辛い四重苦だ。

白人、黒人、先住民の三者とも、まだ半世紀しか経っていない自分たちの若いアメリカでの先祖がそれぞれ残した負の遺産をどのように解決したらよいのであろうか? どのような糸口を掴めばよいのであろうか?

外に向かって一丸となっているときには一時的にこの四重苦を忘れられる。この逃避的な心理を票田として政治家リーダーたちは利用する。懲りずに世界警察を演じてみせる。すべての内紛に干渉した。いままもしている。

ソ連が元気だったときは、四重苦を忘れた。ソ連がロシアになった。ドイツがひとつになった。ヨーロッパが団結した。日本が強くなった。中国が出てきた。だんだん、我が家の秘め事だけが動かずに残ってしまった。そんなとき、9・11事件は起きた。それでもイラクへ干渉し四重苦を忘れた。世界から非難された。それでも政治家リーダーたちは内政より外交の方がまだ無難に時を過ごせるのだろう。それほど内なる問題は、実は深刻なのだ。また、アメリカの政治家たちとは、いまは、それしかできないのであろうか? インディアンには理解の出来ないリーダー像だ。

アメリカ人の陽気さ。世界に普及しないのに異常なまで興奮する国技スポーツ。アメリカンフットボール、ベースボール、バスケットボール。すべて苦しさを忘れるお祭りにみえる。どの国でもみんな持っている長い歴史のある民族の祭りと同じつもりなのだろう。このスポーツを人の気も知らず全部真似してくれるのはアメリカ大陸を知らない親米政治家リーダーを持つ島国大国の日本だ。感謝はしている。

アメリカの特に都市部のインテリたちは、とっくに逃げ道を用意している。40代リタイア論だ。若いうちにリーダーへの道をまっしぐらに歩み、40代でアメリカンドリームを実現し、家族と友人と趣味の世界へ入りこむ。しかし、これができるのは、一握りの力のあるエリートだけだ。そんな優秀な人物が逃げたあとに残された大多数の一般市民はどこに行けばよいというのか? 皮肉にも時代が進めば進むほど、みなでインディアンの悲劇と同じ運命になってしまうようだ。あたかも呪われているように。

勢いで書いてしまった。まだ半年もあるのに玉手箱をあけてしまった。

いったん興奮を冷まし出直してみる。

4月2日 April Fool の翌日。